『握手』　読んだ読んだ　１組

主人公は、ルロイの死に、「何も言ってくれなかった」という気持ちや、大切なルロイを奪われたというショックの気持ちや、自分が何もできなくてふがいないという気持ちや、自分の信頼度の低さから、ルロイへ、自分へ、両手の人差し指を交差させせわしく打ち付けていた。

（北山楓乃さん）

主人公は、ルロイが言葉を濁して病気を隠しているのを解っていたが、それを直接は聞かず、最後に勇気を出して『死ぬのは怖くありませんか？』と聞く。しかし、病気が進行していたルロイは、修道院で息を引き取った。病気のことはうすうす気づいていた主人公だったが、最後まで言わなかったルロイと、言ってもらえなかった自分を責める気持ちで指を打ち付けていた。

（　　くん）

主人公は、ルロイの病が気になり、これを尋ねようとするが、いろんな思いがこみ上げてるから、平凡な質問しかできなかった。対してルロイ修道士は、大人に育った子を見るのを楽しみ、他人のことで悲しむ姿に人柄の良さが現れている。主人公は別れが迫る中、死は怖くないかと気を遣った質問をした。なぜならルロイは病気を隠そうとするのに聞いてしまうと却ってダメだと思ったからである。キリスト教の関係もあるからだ。主人公は、ルロイの死にいろんな思いがあった。役に立てない自分、無視したルロイへの怒り、病への怒りなどが一気にこみ上げて、言葉にならなかったので、癖が移り、両手の人差し指を交差させ、せわしく打ち付けたのである。

（森山拓美さん）